

昨日は寺島先生宅に伺って最近の私の投稿や今後の授業の進め方などについてアドバイスをいただいた。その一部を紹介する。

最初に箱根集会報告の第3回、第4回で取り上げた Nexus について。

私は第3回目でワークショップで指摘された Nexus を「参加者が一致して指摘したもの」と「Nexus 認定に関して議論があったもの」とに分けて、それぞれ 21 文、6 文を抜き出したが、そこにはひとつ抜け落ちているものがあった。以下の下線部である。

[31] In a cigar store he saw a well-dressed man lighting a cigar at a swinging light. His silk umbrella he had set by the door on entering. Soapy stepped inside, secured the umbrella and sauntered off with it slowly. The man at the cigar light followed hastily.

ここはワークショップ当日には議論もされずに飛ばされたしまった箇所である。寺島先生から指摘されて、この文については事前の検討では美紀子先生と山田の間でやりとりが合ったことを思い出した。当日のワークショップを担当していた者としては事前にチェックしておくべきところだった。

結論から先に言うと、下線部の英文は次のような変則的な構造をとっており、「O.Henry の "凝った文体" の一例」（寺島先生の言葉）となっている。つまり、his silk umbrella と set が Nexus の関係になっている。

文法上の主述

S V

His silk umbrella he (had) [set] by the door on entering].

意味上の主述

s'

p'

寺島先生は作者がそうした理由を次のように説明された。「作者が his silk umbrella という単語に読者の注意を引くように文の冒頭に持ってきた。その後の英文を見るとこの his silk umbrella が繰り返して出てきて Soapy が最後に試みた刑務所行きの為の行動が描かれている」。

[32] "My umbrella," he said, sternly.

[33] "Oh, is it?" sneered Soapy, adding insult to petit larceny. "Well, why don't you call a policeman? I took it. Your umbrella! Why don't you call a cop? There stands one on the corner."

[34] The umbrella owner slowed his steps. Soapy did likewise, with a presentiment that

luck would again run against him. The policeman looked at the two curiously.

35 "Of course," said the umbrella man—"that is—well, you know how these mistakes occur—I—if it's your umbrella I hope you'll excuse me—I picked it up this morning in a restaurant—If you recognise it as yours, why—I hope you'll—"

36 "Of course it's mine," said Soapy, viciously.

37 The ex-umbrella man retreated. The policeman hurried to assist a tall blonde in an opera cloak across the street in front of a street car that was approaching two blocks away.

ここでこの英文に関して美紀子先生と山田との間であった事前検討のやりとりも紹介しておく。

#### (1) 美紀子先生 : 20191221 決定版 9

31 In a cigar store he saw a well-dressed man lighting a cigar at a swinging light.  
煙草屋の中で ソーピーは目にした 身なりのいい男が [火をつけているのを 煙草に 揺れる灯りの下で]。

His silk umbrella he had set by the door on entering. Soapy stepped inside, secured the umbrella and sauntered off with it slowly. The man at the cigar light followed hastily.  
シルクの傘を かれは立てかけた 入り口のドアのそばに。 ソーピーは入った 中に、 確保した  
傘をそしてのんびり外に出た それを手に ゆっくりと。 男が[煙草に火をつけようとしていた] 追いかけてきた 慌てて。

#### (2) 山田

31 His silk umbrella [he had set by ...] ではないか。前文の saw の目的語と考える。

#### (3) 美紀子先生からの回答

His silk umbrella を前文の saw の目的語と考えるので、[ ] は不要ではないかということですが、OSV の倒置と考えました。

#### (4) 山田

31 については、His silk umbrella he had set by the door on entering. の英文は、OSVM の倒置になっていると考えるのは不自然な気がしたので、前文の目的語であるならば、His silk umbrella [形容詞節] になると考えました。

#### (5) 美紀子先生からの回答

S' P'  
→ He had his silk umbrella [set by the door on entering] .

単純に倒置になっているのではなく、このような関係になっているのでしょうか。

I have my hair cut.と同じように。

そうするとどのようなふうにプリント化すれば良いのでしょうか。たとえばこんな感じでしょうか？

He had his silk umbrella [set by the door on entering] .

彼は持っていた 傘を [立てかけられた ドアを入ったところに]

こんな感じで良いでしょうか？

(6) 山田 \* 美紀子先生からの回答をよく理解できずに(4)と同じことを繰り返している。

31]については、His silk umbrella he had set by the door on entering. の英文は、OSVM の倒置になっていると考えるのは不自然な気がしたので、前文の目的語であるならば、His silk umbrella [形容詞節] になると考えました。

(7) 美紀子先生からの回答

これについては、

His silk umbrella he had set by the door on entering.

シルクの傘を かれは持っていた [立てかけられた ドアのそばに 入ってすぐの]。

というように、had と set とのあいだを開けて読む、とすれば良いのではないかと思います。

(8) 山田

I have my hair cut.という文は、My hair を強調したいときは、My hair / I have / cut by the barber. ともなりうるということですね。了解しました。

もとに戻ってしまいますが、倒置(OSVM)と考えると次のような和訳が考えられます。

His silk umbrella he had set by ...

彼のシルクの傘を、彼は立てかけていた ...のそばに

彼のシルクの傘が、立てかけられていた ...のそばに

(9) 美紀子先生からの回答

これについては、

His silk umbrella he had set by the door on entering.

シルクの傘を かれは持っていた [立てかけられた ドアのそばに 入ってすぐの]。

というように、had と set とのあいだを開けて読む、とすれば良いのではないかと思います。

以上のようなやりとりが 12 月 21 日～ 25 日午前中まで行われていたのであるが、記号

づけて改めて整理してみると次のようになるだろう。

(1) 美紀子先生の原案

His silk umbrella he (had set) by the door on entering. OSV+M  
シルクの傘を かれは立てかけた 入り口のドアのそばに。

(2)～(4) 山田の改定案

His silk umbrella [ he (had set) ] by the door on entering. O[SV]+M

(5) 美紀子先生の再提案

S' P' s' p'  
He (had) his silk umbrella [set] by the door on entering] . SVOM  
彼は持っていた 傘を [立てかけられた ドアを入ったところに]

(6) 山田の疑問— OSVM の倒置は不自然ではないか？

His silk umbrella he (had) [set] by the door on entering.]

(7) 美紀子先生の再説明

His silk umbrella he (had) [set] by the door on entering. ]  
シルクの傘を かれは持っていた [立てかけられた ドアのそばに 入ってすぐの]。

(8) 山田の納得

I have my hair cut. という文でも、My hair を強調したいときは My hair / I have / cut by the barber. とすればよい。

(9) 美紀子先生のまとめの確認 = (7)

最初は had set と「過去完了形」としていたところが、(had)…[set] ととらえ直されているところが 1 つのポイントである。倒置については、先述したように文脈の流れから作者が his silk umbrella を強調するために行ったと説明することができる。

この点に関して寺島先生は以下の例文を示して、文脈を考えずに機械的に「have to = ~しなくてはならない」と捉えると意味を取り損ねることがあると指摘された。

(Hear) [what] I (have) [to say]]. 私の言い分を聞いてくれ。  
(私が言うために持っていることを聞いてくれ。)  
× 私が言わなくてはならないことを聞いてくれ。

倒置に関して付言すると、his silk umbrella と set by the door on entering が Nexus の関係だったから倒置できたと考えることができる。もしこれが his silk umbrella と set by the door on entering が「被修飾語＋修飾語」という関係ならそれを切り離すことはふつう出来ないだろう。

この点に関しては安藤(2005 : 829)に次のような記述があり、「Nexus の s' は分離されう

ること」と「"被修飾語+修飾語"の結合が強いこと」の傍証となっている。

-----  
次の文は二とおりにあいまいである。

(i) John found [the boy studying in the library].

これは、「その少年が図書館で勉強しているのを見つけた」という意味にも。「図書館で勉強している少年を見つけた」という意味にも解される。

受け身形にすると、その違いが明瞭になる (Chomsky 1957 : 80-2)。

(ii) The boy was found studying in the library (by John).

(iii) The boy studying in the library was found (by John).

-----

倒置表現については、別の O. Henry の作品 "The Gift of the Magi" においても次のような表現がある。いま論じてきた Nexus とは関係ないが、やはり作者独特の「凝った文体」を見ることができる。

4 In the vestibule below was a letter-box into which no letter would go, and an electric button from which no mortal finger could coax a ring. (1) Also appertaining thereunto was a card bearing the name "Mr. James Dillingham Young."

玄関ホールには 階下の あった 郵便受けが [その中に ゼロの手紙が入るだろう]、そして電気の呼び鈴が [それから ゼロの人間の指が 鳴らす ベルを]。 また [張ってあるものは その上に] だった  
名刺 [付けている 名前を "ミスター・ジェームズ・ディリンガム・ヤング" という]。

最初わたしはこの英文に記号づけすることができなかった。意味はわかるが文の構造がつかめなかったのだ。私が理解した意味において英訳すると以下の(2)のようになる。

(2) A card [bearing the name "Mr. James Dillingham Young"] (was) also [appertaining] thereunto.

ところが、この文を文脈の中において情報構造の観点から見ると、以下の(3)のように there was で始めたいくなる。というのは、不定冠詞が付いた名詞、つまり新情報が文の冒頭にくることはふつうないからだ。しかもこの名詞句はかなり長いという理由でも後ろに置かなくてはバランスが悪い。

(3) There was a card [bearing the name "Mr. James Dillingham Young"] [also appertaining thereunto] .

ところが、旧情報である thereunto 「その上に」の方は逆に前に出す必要がある。そのときに also appertaining thereunto がひと固まりの sense unit として文頭に出て形式主語 there は消える。そうやって原文(1)が成立したのではなかろうか。

あるいは今とは逆の順序で考えた方がいいかもしれない。also appertaining thereunto が冒頭に出たことによって SV → VS の倒置が起こったと考えるのである。

いずれにしても、そうすれば、情報構造は「旧情報→新情報」となるし文構造は「センマルセン」の語順が維持される。

旧情報	新情報
<u>Also appertaining thereonto</u> ( <u>was</u> ) a card [bearing the name “Mr. James Dillingham Young”]	
セン	マル      セン

ところが、この原文(1)を以下のように改行して並べてみると、そこには「美しい文構造の反復」があることに気づくのである。

In the vestibule below

(was) a letter-box [into which no letter would go],  
and an electric button [from which no mortal finger could coax a ring.

Also (appertaining) thereonto

(was) a card [bearing the name “Mr. James Dillingham Young”].

文法的には、場所を示す副詞句 In the vestibule below と叙述的な分詞 also appertaining below が文頭に並び立っているわけだが、後者のような倒置の形態を私はこれまでに見たことがない。安藤 (ibid.) の倒置 Inversion においても同様な文例の記載はないので例外的なものと言っていいだろう。しかし、それゆえに O. Henry にしか書けない「凝った文体」となりえているのかもしれない。

先に私は「OSVM : OM=s' p'」の倒置は不自然ではないか」という疑問を美紀子先生とのやりとりの中で述べているが、論を進めるなかで、私がそう感じたのはその文だけを見ていたからではないかということに気づいた。全体の中でその文をとらえてみて初めてその文の意味や構造（この場合は「倒置」）が理解できるということである。前者の his silk umbrella... においては文脈の流れをい、Also appertaining thereonto... においては情報構造と形式を考えて、私は初めてこの英文が理解できたのだった。

さてここからは次のテーマに移る。ふたつめに寺島先生が指摘されたのは私が以下のように Nexus を取る動詞を分類して示したことについてである。

-----  
以上の文例から共通する要素を拾ってみると、動詞（太字）の意味については「知覚」「使役」「援助」「認定」「許可」「状態保持」「方向決定」といったものが目につく。いずれも動詞の意味がその後に「主述関係：～が…する／～が…である」を要求するものである。

知覚：saw, felt

使役：made, moved, rendered

援助：encouraged, assist



s'

p'

寺島先生が He is sure to succeed. のように記号づけしたのは is sure to の部分を「とばし読み」するときそこにある意味上の主述関係、つまり Nexus を見落とさないように読むために付けられたためであり、その文の内部構造を示すためのものではない。もし私が示したような記号が付いていたとするならば、先に述べた「Nexus をとる動詞分類」と同様に、かえって学習者の読みを妨害する情報となる可能性があるのだ。

これも教授者が知っておればいいことで、学習者から質問が出たときに答えればよいことである。それにしてもこのような英文の二重構造に気づいたのがデンマーク人の言語学者だというのは興味深い。英語の母語話者ならば「主語が分離している」という突飛な考えは思いつかなかったのではなかろうか。これは、これまでのあまたの英語研究者が誰ひとりとして英語の「水源地」に気づかず、それを指摘したのは英語が専門でない理系の寺島先生だということと同じだ。

最後に第 5 回目の報告にあった Jespersen (1933) から引用した英文の和訳の間違ったことを教えてもらった。以下の箇所である。p.3 の上段にあった英文である。

今までに彼らは自分のたちの損失を償ったに違いない。

< By now they must have made their retreat good.

正しくは「今では彼らは首尾よく逃れたにちがいないだろう」となる。実をいうと一番でこずったのがこの英文の訳だった。寺島先生は愛用の電子辞書を持ってこられて「make & good & retreat」と入力され、たちどころに make good one's retreat が「首尾よく逃れる」という意味の成句であることを示された。新見先生にもこの辞書を推薦されてその後の翻訳作業に大いに役立てておられるということだった。

みなさんにもお伝えしておきます。アマゾンで中古が入手できます。

PASORAMA G10 SERIES SR-G10001 SII

この辞書には「例文検索」というのがあり、上記のように入力すると内蔵されているいくつもの大辞書から関連する英文が一挙に出てきます。(20200211)